

# 英語強化 歓迎と不安

## Yes...but

### 「将来のため」「学力格差広がる」

「必要なこと」と歓迎する一方、子どもの中で英語能力の格差が広がる懸念も。中教審の特別部会が示した二〇二〇年度以降の次期学習指導要領案。小中学校の英語指導強化策が盛り込まれたことに中部地方の教育現場からは賛否(Yes...but)の声が上がった。英会話教室を展開する民間事業者は、教員支援のセミナーや研修会の拡充を検討する。

小学校は現在、英語に慣れ親しむ「聞く・話す」が中心の「外国語活動」を五、六年で実施。新指導要領案ではこれを三、四年に前倒しし、五、六年は英語を正規の教科とする。

名古屋市長城小の教務主任、堀哲司教諭(四七)は「子どもの将来を考えれば必要なこと」と歓迎する一方で「子どもたちの負担が増えないようにしないと」と話す。同市は各小学校に外国語活動を担う主任教諭を配置しており「主任教諭が研修で学んだことを他の教諭と共有するなど、学校独自でできることも含めしっかりと準備したい」と話す。

一昨年に校内で研究会を立ち上げ、検討してきた長野県松本市寿小の研究主任、竹内千夏教諭(四七)は

### イーオンが教員研修

英会話教室を全国展開するイーオン(東京都)は、学校現場の英語指導強化方針を見越して昨年3月、学校教育課を設置。同社が40年以上続ける「英語で英語を教える」実績や技術を生かし、既に高校への教員派遣や教員研修などを行っている。

同社は2014年から、新指導要領案で英語による授業を求められる中学校教員らが対象のセミナーを毎年開く。今年7月26日の名古屋市を皮切りに8月5日まで岡山、福岡、大阪、東京と計5都市で開催。東京や

大阪で定員を超え、名古屋も定員100人に95人の申し込みがあり、イーオンの広報担当者は「現場の教員の意識の高まりが確実に反映されている」と話す。

同社は今春、小学校教員対象のセミナーも初めて東京と大阪で開き、参加者65人にアンケート。「外国語活動」開始の2年前倒しは9割以上が賛成、5、6年生での英語の教科化は7割が賛成だった。同社は小中学校や高校の教員が英語の指導力を問われる状況が続くとみて、今後も対応強化を検討するという。

### 英語で科学「寺子屋」

産業用ロボット製造の富士機械製造(愛知県知立市)は、小学生に英語で科学の実験を教えるというユニークな教育施設「THANK(サンク)」を9月に知立市西町にオープンさせる。中教審が小学5年から英語を教科化する方針を示したことを受け、プロジェクトリーダーの細井巨企画課長は「小さい頃から英語を学べる機会を増やすことが、世界で活躍できる人材を育てることにつながる」と話している。

施設内では英語で話し、1回90分のレッスンでは、偏光板を使って光の仕組みを学んだり、簡単な実験をしたりする。低学年(1~3年)と高学年(4~6年)の2クラスを平日に毎日開き、外国人と日本人社員が講師を務める。

施設名は、江戸から数えて39番目の東海道の宿場町(池鯉鮒)であることにち



富士機械製造が現代版寺子屋として開校する「THANK」=愛知県知立市で

なんだ。寺社をイメージした和風の建物は天井や壁に木をふんだんに用い、誰でも利用できるカフェも併設した。

ものづくり企業が運営するのは全国でも珍しく、地域に溶け込む現代版の寺子屋として、世界を舞台にものづくりを担う人材を育てる。細井課長は「興味のわく実験を通じて生きた英語を身に付けてほしい。同時に子どもたちの理科離れを防ぎたい」と話す。月謝は週1回の利用で1万2000円から。9月の開校に向けて8月に無料の体験レッスンを開く。問い合わせは同社=電0566(83)0025=へ。

「英語が堪能でない教師もおり、授業の入り方や進め方をマニュアル化する必要がある」と身構える。外国語活動の三年生への前倒し

に「英語への不安が大きくなり、授業の入り方や進め方をマニュアル化する必要がある」と身構える。外国語活動の三年生への前倒し

在、教員が日本語で説明することが多いが、新指導要領案では二年度から英語の説明が基本に。岐阜市東長良中の木股純子教諭(三七)

は「すでに英語での授業が基本。大きな変化はない」と指摘する。同市は一五年度、全国に先駆けて英語を小学一年から教科化するなど先取りしており、木股教諭は「私たちが英語を使うことで子どもにも力が付く実感がある」と自負する。

津市南郊中の稲富裕恵教諭も「生徒の実践的な英語力向上につながる」と期待。大半が既に英語という。文部科学省による教員の英語研修も始まっており「生徒が身に付けた『話す、聞く、書く』の英語力を評価でき

る大学入試に変わってほしい」と望む。一方、滋賀県日野町日野中の石井学教諭(五七)は「教員研修で、授業内容のすべてが英語でなくてはならないと聞いている。英語の説明を理解できない生徒もおり、学力の二極化が進む恐れがある」と懸念した。

学習意欲高まりそう

高橋美由紀・愛知教育大教授(外国語教育)の話 小学校高学年の英語教科化で「読む」「書く」も「聞く」「話す」と同様の能力が求められるようになる。高学年なら音声だけでなく文字情報も交えて学ぶ方が理解が進む。

む。メールやウェブサイトで文字の英語に接する機会が増え、時代の流れとも合致する。外国語活動の評価は、できることに着目して評価することで児童が達成感を味わい学習意欲が高まるのでは。二〇二〇年度までに先生がきちんと教えるようになるのは大変。先生の英語能力向上も求められる。

苦手意識克服が課題

早瀬光秋・三重大特任教授(英語教育)の話 中学校の英語授業が原則英語となる点は、生徒が英語を覚える機会、使う機会が増え、良い効果が期待できる。成績や入試対策も重要だが、英語も日本語と同じように生活の中で使う

姿勢が大事だと生徒に気付かせるきっかけになってほしい。英語に苦手意識を持つ生徒が多く、新しい形の授業を通じ、苦手意識をどう克服させるかが課題。日本語を全て排除するのではなく、むしろ先生が効果的に日本語を使い教える方法を考えないといけない。先生にも柔軟な応用力が求められる。